

キケロ：所謂 *Caesariana*

—その2— クィントゥス・リガーリウス弁護演説

三 浦 尤 三

Ciceros "*Caesariana*"

— 2. Teil — Pro Q. Ligario

(Einleitung, Übersetzung, Kommentar)

Yuzo MIURA

ま え が き

B. C. 46年秋に行われた演説である。プルタルコス『キケロ伝』によるとカエサルは友人たちに「あの男（リガーリウス）はもう前から邪悪で私に敵対しているとわかっているのだから、久し振りにキケロの演説を聞いても差支えはあるまい」（39,6）と云ったという。発言の真偽のほどは勿論定かでないが、これより前に——本紀要の前号でとりあげた——マルクス・マルケッルス弁護演説がカエサルの前で行われている事実を思えば矛盾は明らかである。しかし、その演説は一種の謝辞またはカエサル礼賛であったから、ミロー弁護演説（52年）以来の久し振りの本格的な弁護活動と看做されたのであろう。ただし、キケロ自身も本篇で繰返し述べているように、——とくに(29)以降——この演説もまた独裁者カエサルに対する一種の嘆願であり¹⁾、その意味で '*Caesariana*' の枠を越えるものではない。

リガーリウスは50年、ガイウス・コンシディウス C. Considius の副官として属州アフリカに赴いた。コンシディウスはその夏にローマに戻り、リガーリウスに職務を代行させた。

49年1月、内乱勃発後、ルキウス・アエリウス・トゥーベロー L. Aelius Tubero がアフリカ総督に任命された。が、彼が躊躇している間²⁾、ポンペイウス派で以前アフリカ総督をつとめたことのあるプブリウス・アッティウス・ヴァールス P. Attius Varus がピケーヌムで敗北を喫した後³⁾、アフリカに渡って指揮権を握り、リガーリウスもその指揮下にはいって沿岸警備を命じられた。その後到着した本来の総督トゥーベローに対し両者は上陸を

1) Quintil. 5, 13, 5 もこの演説を *deprecatio* と定義。

2) 本演説(2)参照。

3) B. C. 1, 16 ff 参照。

拒んだのである⁴⁾。トゥーベローは病気の息子クイントゥスとやむなくマケドニアのポンペイユスの陣営に赴き、ファルサロスの戦いの後はカエサルに赦免されるが、ウェアルスが何故同じポンペイユス派のトゥーベロー父子の上陸を拒んだのか謎は残されたまゝである。

49年夏にはカエサルの腹心スクリボニウス・クーリオ Scribonius Curio がアフリカに上陸したが、ユバ王率いるヌミディア人に完敗する。48年にファルサロスで決定的な勝利をおさめたカエサルは46年春、アフリカのタプソスでポンペイユス派の残党を追いつめ、スペインにのがれた一部の者を除き、降伏させた。リガーリウスもその一人で、ハドルメトゥムでカエサルの手におちたが生命は救われた⁵⁾。しかし、イタリア本土に戻ることは禁じられた。

すでにその年の夏に近親者、友人らがリガーリウスの全面的な赦免をはたらきかけ、キケロもその一人となる。リガーリウスに宛てた二通の手紙はこの間に書かれたものである (*Fam.* 6, 13~14)。だが、その時にトゥーベローの息子が訴えをおこしたのである。

クインティリアーヌスが伝えるところでは、訴えの内容はリガーリウスがポンペイユスの側にたっていたというより、ローマ国民最大の敵ユバに協力したというものであった (11, 1, 80)。キケロの演説はその点に触れていない。おそらく——本篇にそれを暗示する箇所もあるが——もう一人の弁護人パンサ C. Vibius Pansa がその問題を取り上げ、キケロは主として赦免の嘆願に力を傾注したと思われる。とは云え、原告トゥーベローの動機、方法、矛盾、彼らの側の問題点などを鋭く突くくぐりは——(6)~(16)及び(17)~(19)など——見事に組み立てられており、すでに当時から高い評価を得ていた⁶⁾。

これも真偽のほどは定かでないが、プルタルコスが伝えるところでは、「キケロが演説を始めると聴衆は感銘を受け、多彩な感情を混えた実に見事な演説が進むにつれて、カエサルの顔色が様々に変わり、心中がおだやかでないことは明らかであった。キケロがファルサロスの戦いに触れると、感情に耐えかねたカエサルは身体全体を震わせて書類を幾つか落とした」と云う (『キケロ伝』 39, 7)。弁論の可能性、または力を強調するための記事と思われるが、実際に歴史を動かしたのも、そしてカエサルを倒したのは言葉ではなく、矢張り剣であった。この演説で赦免を受けたりガーリウスは皮肉にもカエサル暗殺者の一味に加わることになったのである。「彼はブルトゥスの最も親しい仲間の一人になった。病気になった時、ブルトゥスが見舞いに行き、『何という大事な時に病気になったのだ』と云った。するとただちに肘をついて起き上がり、ブルトゥスの右手を握って、『あなたがあなたらしい考えになってくれれば私の病気は癒る』と云った。」プルタルコス『ブルトゥス伝』の有名な一節である (11, 2-3)。

4) *B.C.* 1, 31, 3 参照

5) *B. Afr.* 89 参照

6) *Att.* 13, 24 (12), 2 及び 13, 29 (19), 2 を参照。感激した Balbus は演説を一部カエサルに送った。

訳⁷⁾

(1) カエサル、前代末聞の犯罪を私とは縁戚関係にあるクイントゥス・トゥーベロー⁸⁾があなたのもとに訴えた⁹⁾。クイントゥス・リガーリウスがアフリカにいた、という件である。しかも、抜群の才能に恵まれたガイウス・パンサが¹⁰⁾、恐らくあなたとの親しい関係からと思うが、それを認めてしまった。この件についてはあなたは知る手だてを持たない筈だし、他の人から聞いている筈もないと思い、このあなたの無知をいいことに、不幸な境遇におちいった人を救う心づもりで私はやって来たのだ。ところが、相手側が隠れた事実を端念に調べあげたものだから、私としては正直に云わない訳にはいかないと思う。とくに、友人のパンサが口を差しはさむ余地のないように事を運んでしまった以上、論争はやめて、あなたの慈悲¹¹⁾を得るためにだけ演説を行うべきと考える。これまであなたの慈悲で多くの人が救われたが、それは罪を免ぜられたのではなく、誤ちを赦されたのであった¹²⁾。

(2) だからトゥーベローよ、原告として君は自白をする被告というこれ以上望むものはないものを手にしている訳だ。しかし、この被告は君及びあらゆる賞賛に値する君の父親と同じ側にたっていた、ということも証言している。だから、リガーリウスをとがめる前に君達自身が犯した罪を告白するべきだ¹³⁾。

クイントゥス・リガーリウスは、まだ戦争勃発の気配など全くなかった時、アフリカのガイウス・コンシディウスのもとに副官として派遣されたが、任務の遂行にあたってはローマ市民に対しても、また同盟者¹⁴⁾に対しても立派に振舞い、コンシディウスが任地を離れるに際しては彼に統治を任せなければ人々を満足させることは出来ないほどであった¹⁵⁾。リガーリウスは長い間抵抗したが、実らず、気がすすまないまま属州の統治を引き受けたのである。平和な間、彼の清廉潔白で誠実を旨とする統治はローマ市民にも同盟国の人々にも高く評価された。

(3) 戦争が突然勃発した。アフリカにいる者にとっては全く寝耳に水であった。戦争の報に接すると或る者はよく考えもせずただ野心にかられて、また或る者は当初は生命の

7) 底本として用いたテキストは OCT、A. C. Clark (ed.)、*M. Tulli Ciceronis Orationes II*。

8) クイントゥスの父ルキウスはキケロの従姉妹（伯父ルキウスの娘）と結婚している。

9) 手振り、間のとり方など弁論の実践の一例として Quintil. 11, 3, 108-110に引用。

10) カエサルの同士で、執政官に就いた B. C. 43年にムティナでのアントニウスとの戦いで戦死。

11) 'misericordia'. (29)と(37)でも使用。他に *humanitas*(13; 19), *clementia*(6; 15; 19; 29; 30), *liberalitas*(6; 23; 31), *bonitas*(37), *lenitas*(15) などがほぼ同義語として全篇を通じて用いられている。

12) 「誤ち」の強調は本演説では他に(17)、他の '*Caesariana*' では *Pro Marcello* (13) や *Pro rege Deiotaro* (36) など。

13) 'Itaque prius de vestro delicto confiteamini necesse est quam Ligari ullam culpam reprehendatis' *clausula* の一例として Quintil. 8, 5, 13に引用。

14) 'socii'; 属州の住民だが、ローマ市民権を持たない者。

15) ここからの論証過程は Quintil. 4, 2, 108で模範的な例として取り上げられている。

安全に対する盲目的な恐怖心から、そしてその後は党派的な関心から指導者となる人物を求めた。その時リガーリウスは祖国に思いを馳せ、家族のもとに戻りたいと願ひ、いかなる問題にも巻き込まれまいとした。その間、かつて総督としてアフリカを治めたことのあるプブリウス・アッティウス・ウォールスがウティカに到着した¹⁶⁾。皆、彼のもとに殺到した。そして彼は、少なからぬ野心をもって指揮権を掌握した。公的な決議を経ず、ただ無知な大衆の叫び声で一人の私人に委ねられたものを指揮権と呼ぶことができるならば。

(4) かくして、この種の問題に距離をおいていたリガーリウスはウォールスの到着後しばらくの間一息つくことができたのである。

ここまでは、カエサル、クイントゥス・リガーリウスに何ら罪はない¹⁷⁾。彼が国をあとにした時は戦争は起きていないばかりか、その徴候すら全くなかったのである。彼は副官として平和時に派遣され、帝国においてもっとも平穏な属州で、その平和な状態が更に続くことが彼にとっても都合が良いようなきちんとした勤めぶりであった。彼が出発したこと自体があなたの気に障る筈はあるまい。では、アフリカにとどまったことがいけなかったとでも云うのだろうか。この点はもっと問題が少ない。何故なら、出発は純粋な意志に基づくものであったし、とどまったのは要請されたからであり、むしろ名誉なことであったのだから。

かくして、この二つの時期、つまり副官として出発した時と属州に請われてアフリカの統治にあたった時には咎を受けるような行為は全くないのである。

(5) 第三の時期はリガーリウスがウォールスの到着後も尚アフリカにとどまった時である。もしこれが犯罪というなら、あくまでも強いられたうえでの行為であり、自ら意図したものではなかった。何らかの方法で避けることができたのなら、彼はローマを捨ててウティカを選んだ筈はないし、仲の良い兄弟たち¹⁸⁾と別れてウォールスの方を、そして親類、縁者よりあかの他人とともにいる方を選んだ筈もないのだ。副官として職務に携っている間も彼は比類のない兄弟愛故ずっと望郷の念にかられ、不安に苛まれていた。そんな人が内乱で兄弟との繋りを断たれて平気であることなど出来るだろうか。

(6) カエサル、ここまではリガーリウスの行動にあなたに対して悪意を示すものは何もないだろう。どうかよく見ていてほしい、いかに誠実に私がこれから彼を弁護するかを。私自身のことは構うつもりはない。

何と寛容なことであろう、それは感嘆に値し、いかなる賞賛も惜しむべきではなく、文字や記念碑に託して後世に伝えるべきものだ。マルクス・キケロはあなたの前で一人の男を弁護しようとしているのだが、自身かつて抱いたことがあるとはっきり認めている或る

16) この経緯に関してはB.C. 1, 31で短く触れられている。

17) 弁論が散漫にならないよう論旨をいったんまとめるという実践上の有効手段としてQuintil. 4, 2, 51に引用。

18) 兄弟たちについては本演説(33)～(36)を参照。

種の感情をその人物はあなたに対して抱いていなかった、と主張するのである。しかも、あなたがひそかに何を考えていても恐れないし、その男に関する件に耳を傾けている間にキケロ自身に対してどんな思いが頭をもたげるかなど意に介さない。私がいかに恐れていないかよく見てほしい。あなたの前で話している私の目にあなたの寛大さと知恵が何とひかり輝いていることか。ローマ市民に届くように出来るだけ大きな声で語ることにしよう¹⁹⁾。

(7) 内乱が勃発した時、いや戦いがすでに相当進んでいた時²⁰⁾、カエサルよ、私はいかなる力にも強いられることなく、自分の判断と意志であなたと敵対する側に走った。誰の前で私はこのことを語っているのか。ほかでもない、そのことを知っていながら直接私に会う前に私を国家に復帰させたその本人である。その人はエジプトから私に手紙をよこし、以前のままの私であるように、と云ってきた²¹⁾。また、ローマ世界唯一の最高司令官^{インペラートル}でありながら、私をもう一人の最高司令官として受け入れた。そして、ここにいるパンサが伝えてきたところによると、月桂樹で飾られた束棒斧^{ファスクス}を私が望む限り保持してよいと認めてくれた²²⁾。名誉をいささかも傷つけることなく復帰させてはじめて私を真に復帰させたことになると考えたのである。

(8) トゥーベローよ、よく見ていてほしい、自分の行為についてためらうことなく語る私がリガーリウスに関してどれほどの発言をするかを。自分についてこれだけ語ったのは彼について同じことを述べても赦してもらうためだ。私はトゥーベローの勤勉と名声を快く思うが、それは我々が縁戚関係にあり、彼の才能と研鑽を私としても喜び、また若い親戚の誉れに幾分かあずかることができるのではないかと思うからである。

(9) だが、こう問おう。アフリカにいたことが犯罪になると考えているのは誰か、と。自らもアフリカに行くことを望みながら、リガーリウスに阻まれたと文句を云っている人物、また武器をとって明らかにカエサルに対抗した人物ではないか。トゥーベローよ、ファルサロスの戦いで君は誰に対して剣を抜いたのだ。誰の胸を突こうとしたのだ。君の武器は何を狙っていたのだ。君の心、眼差し、手、燃えたぎる精神は何を目指していたのか。何を君は手に入れようとしていたのだ。何を望んでいたのか。

あまり追いつめすぎたようだ。若者は動揺しているようだ。私自身のことに話を戻そう。私も同じ側にたって戦っていたのだ。

(10) トゥーベローよ、我々がやろうとしたことはここにいる人が持っている権力を我々

19) 声と身振りで裁判官に強く訴える方法の見本として Quintil. 11, 3, 166に引用。

20) 同上。

21) 48年秋から47年秋のブルンディシウム滞在中に受け取ったもの。この間のキケロの心境は Att. 11, 6～27に詳しい。

22) キリキア総督時の51年、兵士たちから最高司令官の称号を与えられ、^{リクトル}警士と束棒斧もあわせてカエサルに容認された。だが、凱旋式は実現できなかった。

のものにすることに他ならなかったのではないか。カエサルよ、あなたに赦されてあなたの寛容さに誉れをもたらしたその人間の演説があなたを残酷な行為へと駆りたてるであろうか。

ところでこの件では、トゥーベローよ、君にいささか賢明さが欠けていると思うが、それ以上に君の父親に一層それを感じる。彼ほどの有能で教養のある立派な人が問題が何であるか分かっていないとは。もし分かっているなら、君がどんな方法であれ今よりもっと別の方法で事をすすめることを望んだであろう。君は素直に告白する人間を告訴している。それだけではない。君が訴えている人物は、私に云わせれば、君よりも正当な根拠を持っている。或いは君が望むなら、君と同じ程度の正当性を持っている。

(11) 驚きを禁じ得ないが、これから私が語ることは不気味としか云いようがない。この訴訟はリガーリウスを裁くためではなく、殺すためなのである。このようなことを行ったローマ市民は君以前にはいない。これは軽薄なギリシア人か粗野な蛮族など異国の習慣である。これ以外にあるまい、君の考えていることは。彼がローマにいられないようにし、家族から切離され、立派な兄弟やここにいる伯父のティトゥス・ブロックス及びその息子、従兄弟らとともに生きることができないようにし、また我々とともに祖国で暮らすことができないようにする、これが君の狙いか。だが、彼はすでにそのような状況に置かれているのではないか。今以上に何を彼から奪うことができるというのか。彼はイタリアから閉め出され、国外追放の身である。だから、君が奪おうとしているのは彼が持っていない祖国ではなく、彼の生命なのだ。

(12) しかし、嫌いな人間は皆殺させた独裁者の^{ディクタートル}23)もとでさえこのようなやり方を通そうとした者はいない。(かの独裁者は誰からの告発もないのに人を殺させ、また褒美を出して奨励さえした。)この残忍なやり方は数年後或る人によって禁じられることになったが²⁴⁾、君は今、その本人に同じように残忍になるよう求めているのではないか。「僕はそんなことは求めていない」と君は云うだろう。その通りだろうと思う、トゥーベローよ、私は君のことは知っているし、君の父も、家も、家名も知っているのだから。君たち一族が道義、人間的教養、学識、その他多くのすぐれた学芸に熱心に取り組んでいることを私はよく知っている。

(13) だから、君たちが血に飢えていないことはよく知っている。ただし、やり方が慎重さを欠いている。状況を見るに、君たちはリガーリウスがここまで受けてきた罰では満足していないように思える。死以外に君たちが求めている他の罰があるだろうか。もし追放を求めるなら、彼が現に追放の身である以上、これ以上求めようがないではないか。それとも赦免を得られないようにすることか。それはもっと辛辣で苛酷だ。我々がひれ伏して

23) スッラ。

24) カエサルが64年に陪審員として迫害の実行者を罰した。

涙ながらに嘆願しているのは我々の立場に自信を持っているというより、ここにいるこの方の人間性を信頼してのことだが、君はそうはさせまいと妨害しようとするのか、そして我々の嘆きを遮り、大地に伏して嘆願する我々を邪魔しようとするのか。

(14) 我々がカエサルの自宅で嘆願したとして、——事実我々はそうしたし、しかもそれが無駄ではなかったと願っているが²⁵⁾、——かりに君がその時突然入りこんできて、「カエサル、気を付けなさい、信用してはいけない、赦してはいけない、リガーリウスの救済のために嘆願する兄弟たちに同情を寄せてはいけない」と叫んだとしたら、人間性などかなぐり捨てたことになるのではないか。我々がカエサルの家で請い願おうとしたことをフォーラムで潰そうとし、多勢の人がこれほど悲しんでいるのに慈悲にすぎる道を塞いでしまおうとするのはずっと冷酷なやり方ではないだろうか。

私の意見をはっきり云おう、カエサル。

(15) これほどの権勢を誇りながら、温情が欠けているとするなら、人から与えられたのではなく、まさしくあなた自身もってうまれたその温情が——自分が何を云っているかよく分かっている——欠けているなら、あなたの勝利には深い悲しみが影をおとすことになるだろう。敗者の中にさえあなたに厳しい態度を期待する人がいるほどだから、勝者の中にはもっと多くそれを望む人がいる筈であろう²⁶⁾。また、誰も赦免を受けないようにあなたの寛大な惜置を邪魔しようとする人がどれほど多くでてくることだろうか、なにしろ赦免を受けた人の中にもあなたが他の者に慈悲を示すことを望まない者がいるほどだから。

(16) 仮に我々がリガーリウスはアフリカにいなかった、とカエサルを説得できたとしても、彼に一人の不幸な市民の生命を救うために誠実と慈悲を理由に嘘をついたとしても、その市民が苦境にたたされ、生命の危険にさらされている以上、矢張り我々の嘘をあばき、論破するのは人間として成すべきことではない。仮にそれが出来る人がいたとしても、それは同じ立場をとり、同じ運命を経験した人ではあり得ない。だが、カエサルに正しい情報が伝えられないのをよしとしない事と、カエサルが同情を示すのをよしとしない事は別の問題である。前者の場合君はこう云うだろう、「カエサル、信用してはいけない。彼はアフリカにいたのだ、武器をとってあなたと戦おうとしたのだ」と。しかし、君の今の主張はというと、「彼を赦すな」ではないか。これは人間が語る言葉でもなければ、人間に向けて語る言葉でもない。このような言葉遣いをする者は、カエサルよ、あなたから人間性を奪いとる前に自らの人間性を捨て去ることになるだろう。

(17) トゥーベローはまっさきにリガーリウスの犯罪について述べることを要求したと思

25) *Fam.* 6, 14 (リガーリウス宛) 参照。

26) 'Quam multi essent de lictoribus, qui te crudelem esse vellent, cum etiam de victis reperiantur?' Cf. J. Lebreton, *Études sur la langue et la grammaire de Cicéron*, Hildesheim/New York 1979, p. 235 (La concordance des temps est négligée).

う。こんな云い方をされた人間は他にいない。それも追求しようとする本人が実は同じ側にたっていたのであるから、一体どんな新しい犯罪をとりあげるのか、とあなたが驚いたことは疑う余地がない。トゥーベローよ、君はそれを『犯罪』と呼ぶのか。何故だ。今回の件をそう呼んだ人は今まで誰もいない。『誤ち』^{ミロチ}と²⁷⁾呼ぶ人もいれば、『不安』^{テイモル}と呼ぶ人もいる。『思惑』、『党派心』、『憎悪』、『頑固』などともっと厳しい云い方をする人もいる。一番辛辣なのは『無思慮』という表現である。犯罪と呼ぶ人はここまで君一人だけである。我々の不幸な境遇に適切で、真実にあう表現を探すなら、一種の運命的な不運がふりかかり、未来を予期することの出来ない人間の心を捉えた、と云えばよいかと思う。つまり、人間の考えが神々の意志に屈したことを誰も驚いてはならないのである。

(18) この勝利者のもとではそんなことはありえないが、我々は哀れな存在であっても別に構わない。だが、私は我々について語るのではない、戦死した者について語るのである。彼らは党派心に駆られ、怒りに身をまかせ、頑な態度をとったかも知れないが、犯罪、狂気、殺人などのかどですでに死亡しているポンペイユスや他の人たちを咎めることのないように。このような事は誰もあなたの口から聞いていないし、あなたの戦いは受けた恥辱をはらすことだけを目指したものであった筈だ。あなたの無敵の軍隊はその権利とあなた自身の威信を守るために行動をおこしたのではないか²⁸⁾。さあ、どうなのだ。和平の到来をあなたが望んだ時、手を結ぼうとした相手は犯罪者たちか、それとも良き市民たちであったか。

(19) カエサル、もし私が犯罪者としてあなたから赦されたと考えなければならぬとしたら、あなたの私に対する功労もそれほど大きなものには思えなくなるのだ。それに、多勢の犯罪者を体面をそこなうことなく救ったとしたら、国家に対してどれほど大きな功績をあげることができたであろうか。始めのうちあなたは内乱とは考えず、分裂と思っていた。敵対的な憎悪ではなく、市民同士の不和と思っていた。どちらも国家を何とかしようと願ったのだが、考え方の違いや党派心から国益を守る方向で一致するには至らなかった。両指導者は甲乙つけがたい立派な人物であったが、彼らに従う者たちはそうとは云いきれない面があった²⁹⁾。どちらの側にも正当な云い分があったので、事に決着をつけることはできなかつた。今は、神々が支援する側を是とするべきだ。あなたの寛容の精神を知っている以上、武装した兵士しか犠牲にならなかつた勝利をよしとしない人がいるだろうか。

(20) だが、一般的な問題はさておき、我々の問題を進めよう。トゥーベローよ、リガリーウスがアフリカを去らないのと、君たちがアフリカへ行かないのと、一体どちらが容易

27) 本演説(1)参照。'Caesariana'では他に *Pro Marcello* (13), *Pro rege Deiotaro* (10) (36)など。

28) ほぼ同じ内容の語句が *B.C. 1, 7, 6*, にカエサル自身の手で書きとめられている。『威信』*dignitas* を掲げたカエサルに対する批判をキケロは内乱勃発時にアッティクス宛の手紙に書いている。(Att. 7, 11)。

29) カエサルの側には得体の知れない連中も多くいたため。

なことだったと思うのかね。「元老院の決定だから、我々がどうこう云えるものではない」³⁰⁾と君は云うだろう。私に云わせれば、たしかにその通りだ。しかし、リガーリウスを副官として派遣したのはほかでもないその元老院だ。しかも、リガーリウスは元老院に従わざるを得ない時に従ったまでのことだが、君たちは望まなければ誰も従わなかったような状況下であえて従ったのだ。私は君たちを非難しているのだろうか。決してそうではない。君たちの家系、家名、家族、教養からすれば他に方法はなかったからだ。だが、自分たちが自慢のたねにしているそのことで他の人を責めることだけは許すことはできない。

(21) ルキウス・トゥーベローは元老院の決議に基いてくじで任務が定められた。本人は病気のため欠席した。任務の免除を願い出る決意だったのである。私はこのことを彼との多岐にわたる関わりから知っていた。我々是一緒に家で教育を受け、戦場では同じテントで眠り³¹⁾、その後も縁戚関係を結ぶことになり、生涯ずっと親しい関係であった。同じ学問に励んだことも我々の絆を強くした。私は彼が国内にとどまりたかった事を知っている。だが、ある人たちが国家という聖なる名をふりかざして彼に強く迫ったので³²⁾、納得はしなかったが圧力に抵抗しきれなかったのである。

(22) 彼は最も力のある人物³³⁾の権威を受け入れたのである。或いは従ったのである。彼は同じ側に立つ人間とともに旅立った。ゆっくりと旅をすすめ、到着した時アフリカはすでに占拠されていた。これがリガーリウスが咎を受ける、または怒りをかう原因となった。しかし、単なる願望が犯罪であるなら、属州の中でも最高の咎で、ローマと戦うにはうってつけのアフリカをわがものにしようとした君達の方が、他にそれを望んだ人とくらべて罪が軽いということにはならないのではないか。それに、リガーリウスはそれを目論んでいたのではない。指揮権を持っていたのは自分だ、とウァールスが云っている。間違いなく束棹斧フラスクスを持っていたのは彼だ。

(23) 事情がどうであったにせよ、トゥーベローよ、「我々は属州に足を踏み入れることができなかった」という君たちの訴えにはどんな意味があるのか。もし足を踏みいれていたらどうだったと云うのか。属州をカエサルの手へ渡したであろうか、それともカエサルと対決して手放そうとしなかったであろうか。カエサルよ、あなたの寛大さが我々にどれほど勝手な振舞いを許しているか、それ以上にどれほど大胆不敵な行動に走らせているかよく理解してほしい。もしトゥーベローが、彼の父は元老院決議並びにくじで派遣されたアフリカをあなたに委ねるつもりだった、と答えるなら、私はその当事者であるあなたの目の前でためらうことなく彼の発言をとてつと厳しい言葉で非難するであろう。というのは、

30) 父 L. トゥーベローをアフリカ総督に任命した決議。本演説(21)参照。

31) 同盟市戦争当時、ポンペイウス・ストラボ（ポンペイウスの父）の配下で。

32) ポンペイウス及びその周辺の人たちか、或いは M. マルケッルスか。

33) ポンペイウス。

たとえそれがあなたにとって好ましいことであっても、決して認めなかったであろうから。

(24) しかし、もうこのことには一切触れないことにしよう。L.トゥーベローが意図もしなかったことを行おうとしていたとの印象を与えないために、これ以上あなたの辛抱強い耳を悩ますのはやめよう。

さて、君たちは内乱でのカエサルの勝利に最も敵意を抱いている属州にやってきた。カエサルに敵意を抱く強力な王³⁴⁾が支配しており、結束が強く、規模も大きいローマ市民団体もカエサルとは立場を異にしている。君たちに尋ねよう。何をしようとしていたのだ。しかし、君たちが何をしたのかその結果を知っている私が、何をしようとしたのかその意図が分からない筈があるだろうか。君たちは属州に足を踏み入れようとして阻止されるという著しい不正を受けた³⁵⁾。

(25) 君たちはどのようにその不正に耐えたのだ。誰に苦情を訴えたのだ。勿論、その権威に従って君たちが戦いに突入したその人にだ。もしカエサルのために属州に赴いたのなら、そこから閉め出された時にすぐカエサルのもとに行っていた筈だ。が、君たちはポンペイユスのもとへ走った。君たちがカエサルに訴えていることは一体何なのだ。君たちは、その人のせいでカエサルに対抗することを妨害されたというその人をカエサルに訴えてきているのだ。この点に関しては——そうしたいなら——嘘でもついて属州をカエサルに委ねるつもりであったと法螺を吹くがよい。本当は君たちはウァールス及びその他の人たちに妨害されたのだが、賞賛を受ける機会はりガーリウスのせいで奪われた、とあえて認めよう。

(26) だがカエサルよ、誉れ高きルキウス・トゥーベローの一貫した姿勢をよくみてほしい。私としてはそれに敬意を表するにやぶさかではないし、現にそうしているが、あなたがとくにこの美德を常々讃えることを知っていなければ、こうして口に出して述べることもなかったろう。彼ほど首尾一貫した姿勢を示した人が他にいただろうか。首尾一貫した姿勢と云ったが、忍耐力といった方がよいかもしれない。内乱に際し、受けいれを拒まれ、しかも冷酷にはねつけられた党派に再び加わろうとした人が果してどれだけいるだろうか。これこそ高邁な精神の証しであり、一度とった立場や表現した考えをいかなる恥辱、いかなる力、またいかなる危険によっても変えることのない男の証しである。

(27) 名望、品格、威厳、才能などの点でウァールスがトゥーベローと同等であったにしても——実際はそうではないが——元老院決議に基き正当な指揮権をもって属州にやってきた、という点に関してはトゥーベローにたしかにかなわない。上陸を拒まれてもトゥー

34) ヌミディア王ユバ。

35) 「アフリカのウティカに輸送船と共に到着したトゥーベローをアッティウス・ウァールスは港からも街からも締め出した。そして、病気にかかっていたトゥーベローの息子を上陸させることも拒み、それどころか錨をあげてその場から退去するように迫った。」(B.C. 1, 31, 3)

ペローはカエサルのもとへは行かなかった、怒っていると思われなかったためである。また、家にも戻らなかった。落胆していると思われなかったためである。だが、どこか他の処へ行ったわけでもない、ここまで歩み続けてきた路線を捨てると思われなかったためである。彼はマケドニアのポンペイユスの陣営に向った。一度不当にも追い返された側に行ったのである。

(28) そしてどうなったか。訪ねていったその人物の心を動かすことができなかった時、自分の立場にかける情熱が薄れたのだと思う。君たちはただ陣営に身を置くだけで、心では距離を置いていた。或いは、内乱の常で、君たちが他の人たち以上にそうであったのではないかもしれない。我々は皆勝利をおさめようとの意欲でいっぱいだった。私自身は常に和平の推進役であったが、もう手遅れであった。武装した軍隊を戦線で目にすれば和平の可能性を考えるのは愚の骨頂であった。私に云わせれば、誰もが勝利を願っていたのである。勝たなければ滅びるしかないところに来た君の場合はとくにそうであった筈だ。しかし、現在の状況からすれば、あの時点で勝利を手にするより救済された今の立場の方でよかったと思っているに違いない。

(29) トゥーペローよ、もし君たちが一貫した態度を悔いるなら、或いはカエサルがその善意を悔いるなら、こういったことは私としては口にする気はないのだ。ここで聞きたい、君たちは君たち自身が受けた不正³⁶⁾を追求しようとするのか、それとも国家が受けた不正か。もし国家が受けた不正の方なら、君たちが己れの立場に固執し、かの陣営にとどまったことをどう説明するのか。もし君たち自身が受けた不正の方なら、カエサルが君たちの敵に怒りをぶつけるとするのは間違いだから勘違いしないように。彼は自分の敵も赦したほどだから。

よもや私がリガーリウスを守ることに全力を注いでいるような印象をあなたに与えることはないだろう。まさか彼の行為をめぐって論陣を張っているようにはみえないだろう。私が語ったことは全てあなたの人間性や寛容と慈悲の精神に訴えようとしたものである。

(30) 私はあなたが職務上フォルムと結びつきを持っている間はいっしょに多くの裁判を手がけてきた。しかし、「裁判官諸君、どうか赦してくれ。彼は間違っただのだ。つまりいてしまったのだ、悪意はなかったのだ、もし将来いつか…」といった調子で語ったことは一度もない。これは父親を前にした時の語り方だ。裁判官に対しては、「彼はしていない、意図もしていない、証人は間違っている、でっちあげの犯罪だ」と語るものである。カエサルよ、リガーリウスの件に関しては裁判官であろうとしている、と云ってほしい。彼がどの陣営にいたか調べてみよ。私は沈黙を守る、そしてもしかしたら裁判官の心証をよくするかもしれない事柄もあえて拾い集めたりしない。例えば、彼は副官として内乱勃発以前に出発し、まだ平和時にそこに残り、予期せぬ戦闘開始にあわてたが、内乱の間苦々しい

36) 'Vestras iniurias', objective genitive の代用としての所有代名詞。Lebreton, p.100

思いを抱くこともなく、今は心からあなたの側にたっている、といった具合に。裁判官にはこう語るものだが、私は父に話すようにこうたのむ。「私は間違いました、うかつに行動しました、後悔しています。あなたの寛容さにすがりたい。あやまちを赦していただきたい。どうかお赦し願います。」今まで誰も赦された人がいないなら、厚かましいことかもしれない。しかし、多くの人が赦されているのだから、希望を与えたその張本人として救いの手を差しのべてほしい。

(31) それともリガーリウスの件に関しては望みを抱いてはいけないのだろうか。他の人のためには赦免を乞う機会が私には与えられているというのに。だが、この演説で問題が解決するとは考えていない。それに、リガーリウスのためにあなたにはたらきかけているあなたの友人達の尽力でも解決するとは期待していない³⁷⁾。人を救うために骨を折る人は多くいるが、私はその際あなたが何を重視するのか観察して、知っている。つまり、嘆願する人の顔ではなく、根拠を重視するのだ。また、嘆願する人があなたとどれほど近い関係にあるかではなく、救済しようとしているその人物とどれだけ近い関係にあるかを重視するのだ。そうやってあなたは身近な人に多くを与えるものだから、あなたの寛大さを享受する人たちの方が多くを与えるあなた自身よりも幸せに思えることがよくある。だが、すでに述べたように、嘆願そのものより根拠の方があなたにとって重要であることを知っている。そして、その苦しみに最も正当性があると思われる嘆願者に一番強く心を動かされるといっても知っている。

(32) リガーリウスを救済することであなたは仲間の多くに喜びを与えることになるだろう。だが、いつものように次の点を考えてほしい。私は勇敢なサビーニ人を提供することができる³⁸⁾。あなた自身大いに認めている者たちだ。それに彼らの土地も提供できる、イタリアの華、国家の柱ともいうべき土地だ。あなたは彼らのことをよく知っている。皆どれだけ悲しみ、苦しんでいるかみてほしい。ここにいるティトゥス・ブロックス——あなたが彼を高く評価していることを私は疑わない——及びその息子の涙と悲しみはご覧の通りである。

(33) 彼の兄弟たちについては何を語ればよいだろうか。一人の人間の生命だけを問題にしているとは思わないでほしい、カエサル。国家の中にひきとめるにせよ、国家から追い出すにせよ、扱われるのは三人のリガーリウスである。クイントゥス・リガーリウス一人が追放されるなら、残った兄弟たちにとっても祖国や、家庭や、家の守護神よりも追放の方が望ましいのだ。彼らが兄弟愛を發揮し、家族の絆を重んじ、苦しみを味わいながら行動しているのだから、その涙と愛情と兄弟愛があなたの心を動かすよう願ってやまない。

37) 例えばもう一人の弁護人パンサ。

38) サビーニの地はリガーリウス家の故郷。

勝利を呼んだあなたの声が力を発揮せんことを。あなたは自分に敵対しない者は味方と看做すが、我々はともに行動しないものを敵と看做している³⁹⁾、とあなたが云っているのを聞いたことがある。ここに揃った誉れ高き人々をみてほしい、プロックス家の人々を、ルキウス・マルキウスを、ガイウス・カエセティウスを、ルキウス・コルフィディウスを⁴⁰⁾、皆ローマの騎士階級の出身で喪服を着てここに参列しているのだ。あなたは彼らはただ知っているというだけでなく、信頼に値する人たちであることを知っている。仲間にするべき人はあなたの仲間に加えなさい。今までと同じように今度も本当の事を語っていることが明らかになるためにも。

(34) もし心の奥底をのぞくことができ、兄弟たちが心から一つに結ばれているのを知れば、彼らが皆あなたの側にたったであろうことが分かるだろう。リガーリウスがもしイタリアにとどまることができたら、兄弟たちと考えを同じくしたであろうことを誰が疑うだろうか。年令差が殆どないこの兄弟たちが同じ考えを持ち、まるでひとつに溶けあっているようにしっかり結ばれているのを知っているなら、彼らが異った立場をとって、異った運命を歩んだであろうと考える者はいまい。心の中では彼らは皆あなたの側にたっていたのである。彼らのうちの一人が時局の影響を受けてひき離されたが、それは意図したものでなく、たとえ意図的に行動したのであったとしても、その種の人間は他にもいた訳であり、しかもあなたはそういう人たちを救済することを望んだのだ。

(35) かりに彼が戦場に赴いたにせよ、またあなたとだけではなく兄弟たちとも袂を分かったにしても、ここにいるあなたの仲間たちがあなたに嘆願しているのだ、あなたの官職にことごとく関わってきた人間として私はティトゥス・リガーリウスが首都財務官としてあなた及びあなたの地位に対しどれほどのことを成したかよく覚えている。だが、私が覚えているだけでは十分ではない。あなたも彼の財務官としての仕事を他の財務官のそれと比較してもう一度思い出してくれることを願う。なにしろあなたが忘れることといえば受けた不正だけなのだから。これこそあなたの精神の真髓であり、もってうまれた秀れた性質である。

(36) つまり、ティトゥス・リガーリウスは当時ひたすらあなたの側にたとうとし、きちんとした人間であるとあなたに思われるよう心がけていたのだ。(現在の事態を予見することなどは勿論できなかった。) その彼が今こうして兄弟の赦免をあなたに頼んでいるのだ。この兄弟愛に心動かされて二人の兄弟たちの願いを叶えてあげるなら、立派で非のうちど

39) 「ポンペイウスは、国家のために何もしない人を私は敵とみなす、と宣言したが、カエサルは、中立を守ってどちらの側にも与しない人を私は味方とみなす、と声明を出した。」(スエトニウス『カエサル伝』75)

40) Corfidius. キケロの勘違いで、この時はすでに死んでいた。翌45年7月のアッティクス宛の手紙で名前の削除を求めたが、すでに遅く今日まで伝わることになった (*Att.* 13, 39(44), 3)。我々が現在手にしているテキストが本来の演説ではなく、しばらくたって書きとめられたものである事を示す証拠でもある。

ころのない三兄弟を彼ら自身に、ここに集まっている人々に、そしてあなたの仲間である我々に返したというだけでなく、国家にもとり戻したことになるだろう。

(37) さあ、最近元老院で高貴にして名声高い人物に対して行ったのと同じことを⁴¹⁾今度はフォーラムで立派な、そして集まっている多勢の人にも評判のよい兄弟たちにもしてあげなさい。かの人物を元老院の一員として返したように、この人を市民のもとに返しなさい。あなたは市民の意思をいつも大切にしてきたのだから。そして、あの日があなたにとって栄光に満ちた日であり、一方市民にとっては感謝に満ちた日であったなら、カエサルよ、ためらうことなく同じような誉を得る機会をできるだけ多く求めてほしい。市民にとって温情にまさるものはなく、あなたの人徳の中でも人々が一番感激し、感謝するのは慈悲に他ならないのである。

(38) 人間は人を救うことによつてのみ神に近づく。できるだけ多くの人を救える力、あなたが手にしうるものでこれ以上のものはない。また、できるだけ多くの人を救いたいという意志、あなたの性格でこれ以上すぐれた部分はない。

この件はおそらくもっと長い演説を必要とするのだろう。だが、あなたの性分はきっともっと短いものを望むだろう。私なり他の誰かなりが話すよりあなたが一人で考える方が有益と思うからここでやめることにしよう。ひとつだけ云わせていただこう。ここにはいないあの人物を救済すれば、ここにいる人たちも救済することになるであろう、と。

1992. 1. 31 受理

41) M. マルケッルス の件。